

かくということ

shushu

1、えとことば

一般的に、絵画・イラストは、言葉と切り離されている、あるいは離れたところにある、そういうものとして捉えられているように思う。

絵を目にした際の、「言葉にできない感動」とか、「言葉に表現しきれない魅力」といった言葉は、その絵の最上級の讚美として扱われている。

また、絵に限らず、文字ではない、形を使って表現するタイプのアーティスト、天才的な人物についてくるイメージとして、「小さいころから言葉を使って表現することに違和感があつて(もしくは苦手で)、アートが自分よりどころとなつて、そして似たような境遇の仲間たちやファンと出会つて、アートというものが自分の生きていく居場所になつている」、こつこつとした類の異口同音、本人のインタビューや逸話、果ては典型的な物語として蔓延している。そういう人が表際いるのは確かなんだが、そればかりがあたかも芸術家の模範例みたいに扱われ出してしまふのは、なんか違和感がある。

そのせいで、言葉でないタイプの芸術に対して、(すごい、いい、エモい、など)としか言えないように(下手に言葉で何かを述べることが憚られたり、言葉や理性をもとに芸術作品をつくるのが下等に思われたりするようなら、それは非常にもつたいないことだと私は思う。

だいいち、言葉だつて芸術であらう。

私は、物書きの端くれであり、また同時に、絵描きの端くれである。

この三文文士会という文芸サークルに所属しているが、そこで絵を描いている。ありがたいことに、2022年新入生歓迎号から、今年度のすべての三文文誌の表紙絵に関わらせてもらうことができた。

そんな中でふと思つたのは、文士たちはどのくらい表紙絵のことについて考えているのだろうか、ということである。というか、そう思うくらい、たかが表紙絵、主役となる中身に体裁をつける程度の存在に、注意を払うことなど減多に無いのではないか、という所感があるのである。

個人的なことを言うと、私はもともと絵を描く人間なのもあつてか、普通に表紙買いかしがりである。シリーズ小説の表紙は基本気にしているし、表紙絵が見れなくなるから続き書いてくれ、と半分本気で思っている小説がある。

ということもあつてちよつと神々のあらしい先生に訊いてみたところ、彼は、絵について話したくても門外漢すぎて何を言つたらいいか分からないところがある、という。

門外漢、というのはちよつといい視点かもしれない。よくわからなければ興味は湧かないし、よくわからなければもし興味があつても触れづらい。幼稚園の頃のお絵描きの時間から延々と情性で絵を描き続けてきた人間には、絵を描くことをやめた、もしくは自然とほとんどしなくなった人間が世の大勢を占めることすら、気付けないものである。

そう思うと、批評会には挙げられることのない表紙絵のことであるし、いっそこつとして表紙絵担当の思うところ

ろを、備忘録も兼ねて記してみるのもありかと思つた次第である。あまりこういうメタなことは言うものではないが、こうすればたまには批評の対象として扱うということもできるかもしれない。ただ、表紙デザイン論とか美術史みたいなそういう普遍的なものではなくて(私がそういう話をして仕方がないだろうし)、表紙絵担当文士の一個人的な私の話になつてしまうから、あまり期待はしないで、とはいえとりあえずせつかくだから読んでいつてほしい。

私は、言葉に(も)重きを置くタイプの絵描きである。それはせつかく文芸のサークルで表紙絵を描くのだから、というのもあるし、それ以前に、私は結構言葉を大事にしていて、結構言葉から絵をつくつてるところがある。いつも持ち歩いているクロッキーには、絵というより言葉によるアイディアメモのほうが多くを占めている。

マインドマップというのはご存じだろうか。知らないならググりながらも聞いてほしいが、私は大抵の絵を描くとき、特に三文文誌で頼まれて真面目に描いているときは必ず、マインドマップを描いてから絵に取り掛かつている。

まず、紙の中心にテーマを書く。例えば「三文文誌2022 春号 表紙」みたいな感じで。その後、それぞれの概念に対して連想されることとか、そのテーマで描くのにふさわしいと思つたこととか、描くにあつてのそれぞれの概念への疑問とか問題とか、そういうのを線でつなぎながら、関係性の中で、周りに書き出していく。

そうすると、頭の表層の部分で考えていたことがはっきりするので、思考がまとまりやすくなる。また、書き

広げていくうちに、意外な取り合わせのシナジーが見つかったりとかして、描くのが楽しみになってくる。

それからの過程はそのときによってまちまちで、すんなり描く工程に移るときもあれば、どうもしっくりこなかったり、寝かせた方がいいかもしれないと思ったときは一旦寝たり放っておいたりして、深いところの、抽象的な思考のつながりを待たたりする。

そういう過程を経て、何を配置して、何をモチーフに、何と何を組み合わせ、何を變形させて、どんなふうに、具体的に何をどう描くのか、要は主題を決定する。この時点でタイトルが決まっていることもままある。

実際に描いてみるころでも、言語化できる部分、ロジカルな部分というのは多い。

私は、清書する画面に描き始めるときはいつも、画面を区切る線を引くところから始めている。画面のどのあたりに置くと目立つようになるとか、視線誘導とか、そういう類のことは、考えてみれば当たり前だが、普通に方法が確立されているのだ。私も厳格に守って描いているというわけではないのだが、変に感覚に頼って無駄に迷うところも減るし、先人の知恵をありがたく使わせてもらっている。

こうしてみるとやはり、絵を描くというこの中にも、言葉というのが強く影響を与えているのは確かなような気がする。少なくとも私はそうである。

人は言葉を通してしか世界を認識することはできない、これは少々言いすぎかもしれないが、ちよつとドキッとするくらいにはわかるころがある。言葉はなくても景色は映るかもしれないが、色面そのままでは「これ」と「あれ」と「それ」の区別もつかない。言葉が、連続す

る粒子と粒子のあいだに線を引き、物事を分ける。言葉こそが虹を有限色たらしめる。「分かる」とはよく言ったものかもしれない。

もちろん、漠然としたイメージの感覚も否定しない。深いところでは、それが言葉の絡まりが作り出した世界の像なのか、感覚の蓄積がふりつもったイメージなのか、とけあつて「分かった」ものではない。きつと両方だろうし、どちらでもないのだろう。

そのすべてが好きだから、そのはさまというか、重なりというか、ひろいところを自由に引き来したいから、私はかくことをやめられないのだと思っている。要はひとが好きということか。

こんな話をしてもなんだが、絵画作品における、言葉で表現できるすばらしさというのは、探してみれば結構ある。逆に、文芸作品を読んでも、言葉で表現されたものでも、それが計算高くつくられたものであつても、それが「全体」として積み上がり、組みあがつたとき、それが与える感動は言葉にならないことだつてしばしばある。

なんという話をしたついでに、私の嫌いな言説の話でもしようか。なにも何か傷つけようということではないのだが。

作品は完成した時点で作者を離れるのか、という議論がある。作品は世に放たれた時点で作者からは離れるのだから、作者がその意図について言及したりするのは無粋だ、という考え方である。

私自身の立場としては、確かに作品は完成した時点で

作者を離れる面もあり、どうつくられたかに関わらず、受容者が好きに感じていいと思つている。ただ、だからといって、作品が完全に作者と関係なくなるということはないし、加えて、作者を完全に作品鑑賞から追放してしまうというのも違うのではないかと感じていた。

私はなにも、みんな意図について喋つてくれよとか、作者の考えたことが全てだよ、とかそういうことが言いたいのではなく、こればかりは作者のスタイルとか、作品の雰囲気とか、そういうのに左右されるものだろう、としたい。でも、語らないことをすべての作家・作品に共通するような普遍的原理かのように主語を大きくして語られてしまうと、不毛な沈黙を強いられるようなところがあつて、好きじゃない、そんな感じなのだ。どうして作家だけが、おしゃべりから学びを得ることを禁止されねばならないのだろうか。

また、他の文脈では、この言説はしばしば、作品を分析することに対する批判としても持ち出される。

作品を知るために作者の出自だったり、交友だったり調べて分析したり、または作品から作者の人となりを知ろうとしてみたり。そういう作者と結びつた小難しい分析や解説が、作品を純粹に（この言葉にも少々懷疑を抱くが）鑑賞したい人たちにとっては、余計なものに映るらしい。

特に典拠を示すようなものでもない雑文なので詳しい言及は控えるのだが、ふと目にした文章に、モノの言葉を引用しながら、絵は理解するしないで語ると魅力がわからなくなる、絵を見るときは感覚が全てであるというようなものを見つけたことがある。これは非常に暴力的な発言ではないだろうか。

たしかに、絵を見て、感覚的に、いいな、とか、気持ちが悪いな、とか、そういういわゆる原初的な感情を抱くこと、そういった感情からなにかをつくらうとすると、それはなにも間違っていないし、むしろ大事なことだったりする。でも、それが全て、と言ってしまったら、それは暴力だと思ふ。

第一、作品というのは、某聖典とは違って、突然無から出現するものではない。作品は、思い立ったらできるものではなく、必ず制作過程というものがあ、大抵のものにはそこには紆余曲折があるということなど、芸術家自身が一番わかっているのではないか。

モネのような芸術家が、純粹に美しさを感じてほしくて、もしくはただ表現したくて、描いたとしても、それには必ず過程があり、文化的な系譜がある。どんな文化にも、周囲のどんなものにも影響されず、どんな時代性にも囚われない人間などいない。それを歴史的に並べてみたり、比較してみたり、そういったことに思いをさせる、そういう楽しみ方だって悪くない。

作品そのものにしたって、色彩や構図、どうしてそれが人々を惹きつけるのか、そういう理由を考えてみることに、なんの罪があるというのか。

それに、そうした所謂理性的なそれらによつて、魅力がなくなってしまうほど、感覚って貧弱なものだろうか。私はそうは思わない。言い知れない感動とか、自分の奥底からこみ上げてくるような好きとか、そういうものは、知識を得る程度で簡単に消えはしない。私の知識が浅薄なだけかもしれないが、少なくとも、ちよつとくらい勉強したくらいではなくならないのは確かなようである。

なにも博識になつて知識で芸術を分析できることだけ

がスバラシイなんてそんなことは言わないが、感覚だけが全てなんて言ってしまったら、確かに自由かもしれないが、無秩序なばかりで誰の話も聞かない、そんな不毛な営みになってしまうのではないだろうか。それは自由というより勝手である。

そうしてなんだか芸術というのが分からなくなつてしまつて、芸術が一部の「センスある」人達のわけわからない営みのように映つてしまい、敬遠してしまう人だつているんじゃないのかという気がして、もったいないと思うのだ。

絵画は非言語の所有^もでもなければ、非言語は絵画の所有^もでもない。重なり合うところはあれど、それらを安易に同一視することは、自分とそれらとを遠ざけることでもある。

2、主題とテーマ 『三文文誌』の「表紙」として

さて、関係ない話はそのへんにして、三文文誌の表紙に話を戻そう。

少し前にも言及があつたが、私はいつも、提出する表紙絵の（ほぼ）全てにタイトルをつけている。そしてそれを目次の部分に明記してもらつてゐる。（文士および読者の皆さんは気付いてゐるだろうか。）これは最初の表紙絵のときに編集の加古さんにそうしたい旨を伝えたところ、快諾していただいたので、以降もありがたくそうさせていたいただいでいるのだが、それについて、意図や思い

に言及してみる。

意図の一つとしては、それが作品であるから。

『三文文誌』という文芸誌を構成する芸術作品の一つとして、それが文芸作品ではないにしても、同じように作品として提出するなら、それにタイトルがあつて目次に連なつていてもいいだろう、という体裁上の理屈。

個人的な意図としては、タイトルがあるからタイトルがある、ということ。

これはもう理由ではないのだが、せつかくタイトルがあるのだから載せたつていいじゃないというノリ。

じゃあなんでタイトルがあるのかというと、それはやっぱり言葉だから、ということだろうか。

こうやつて言葉をつかつて絵を描いていて、そしてそうやつて主題を決めている以上、そこにはすんでのころまで言語化されかかつた意図や主張、テーマがある。そうするとそれは（たいていは抽象的な言葉となつて、タイトルとしてつけたらいいんじゃないかってかんじで取り残される。

あとは、絵を分析してもらつて、絵から何かを感じてもらつとつかかりにでもなれば、と思つてつけている部分もある。作者の意図がすべてストレートに伝わるのが正義だとも思つてゐるわけではないが、表現する以上は伝えているのである。伝える努力をすることは何ら間違つていないはず。

皮肉を言えば、絵の力を信じていない、絵としての表現力が未熟だ、ともとれるだろうが、再三絵と言葉のつながりについては話しているし、言葉的要素も含めてのイラスト作品にしているとでも説明しておこうか。

マインドマップからいよいよ絵にしていく過程で、主

題・テーマをつくる時、大抵は主に二つのテーマの取り合わせになる。(厳格に分かれているわけではないが。)一つは『三文文誌』の表紙絵としてのテーマ。「表テーマ」とでも呼んでおこうか。

文芸誌の表紙を飾るということで、文芸誌っぽくしたり、文学に関わる主題にしたり、三文文士会に似合うテーマにしたり、そうした方がいいだろうという体裁。あとは三文のなかでの思いを反映した部分とか、そういう対外的な部分。

もう一つは完全に個人的なテーマ。ひとつめとあわせて「裏テーマ」としよう。

最初に加古さんと、どんな表紙絵にしようか相談した際、「作家性重視でもいいですよ」との言葉をいただいたこともあり、個人的に描きたいと思っていたこととか、作者の趣味とか、実験的な挑戦とか、そういうことも多分に盛り込ませていただいている。

主にこの二つの要素で表紙絵を制作している。

表紙絵、という、作品をまとめるとき体裁上つけられるものであり、また、それそのものも作品である、という微妙で多義的な立ち位置。そういったなかでいろいろなことを考えながら表現をするというのが、これまた楽しいのだ。

3、個々の作品について

個々の作品についての思うところや意図について、時系列順に並べて記してみようと思う。おこがましいかもしれないが、それぞれの作品について、考えたり批評し

てみたりする機会、その端緒になればいいとも思っている。批評会を想定したつくりになってしまつて申し訳ないが。

もしも、個々の作品についての批評がしたいという人がいて、そしてそこに作者の意図をあまり介在させたくないと思うなら、ここは読み飛ばすのがいいのかもしれない。

もし読んでくれるというのなら、物置の中から2022年度の三文文誌のアーカイブを頑張つて引っ張り出してきてもいいかも。

① 新入生歓迎号 — ㊦プラスの悪魔と昨日の友達とその夢 —

初めて三文で描いた表紙絵で、白黒印刷であり、自身デジタルイラストに慣れてなかった都合もありボールペン画。点対称と線対象をあわせたような構図を体現するのに苦労した。自分の中ではうまくいった方じゃないかと思つている。タイトルが長い。

表テーマは、アポロンのものとデュオニソスのなもの、対立的なもの合一。

新入生に対しての案内、イメージを伝えるものとしての役割を考えたときに、一年生の間、三文文士会で活動して思つたこと、感じた雰囲気、三文文士会とはどんなもの?というところをテーマにするのが適切だろうと思つた結果こうなつた。それ以前に活動を通してかなり刺激されるものがあつたので、表紙絵がなくとも何らかの形で発露はあつたらうなと思つた。

要はこの絵は三文文士会とはなにか、もつと言えは、

芸術、人間とは何か、具体的には、作品提出↓批評会↓作品提出、という三文の営みを表現しようとしたものである。

私は一年時の批評会の中で何度も、作者同士が執筆スタイルの違いで、世界を生み出す方法の違いで、決定的に対立している瞬間を目にした。だがそれは確かに対立であれ、当の作者たち、そしてそれをとりまく批評会の空間は、至上的な幸せなのである。

作品をつくるときのスタイルは、簡単に例を示すなら、事前に構造を確固として組んでからつくっていくタイプの作家や、構造をガチガチに組まずに浮かんできたとおりに描いていくタイプの作家といったように、その書かれ方、また、読み方が人によってさまざま異なっている。

そうした違いは作品を一読しただけでは分からないこともあるだろうが、ここは三文文士会である。作品は批評会にて、作者ごとコミュニティの中に放り込まれる。

そうしたなかで作者と、読者のふりをした作者が互いに接触をする。世界と世界が衝突する。

そうして起こるのは作者と作者の決定的な対立、わかりあえなさであることもあるが、しかし同時に互いの世界観の崩壊であり、接続であり、侵食であり、変化である。

そうしてお互いの中に新たな世界が刺激される。

このやりとりは三文文士会の批評会という空間の中で絡まり合つてひとつのネットワークに、宇宙になる。

そしてそれは、小説を書く時が分かりやすいが、ひとりひとりの世界の中にも同じことが言える。理性的な人、感性的な人、確かに傾向はあるけれど、でもそのひとりひとりを深くみると、そのふたつの境界は決して定かじゃない。ひとの中で理性と感性の境界はとけあつて、

思考と思考は複雑に絡まり合って、ひとつの世界を形づくっている。さらにひとりひとりの中の、思考のひとつひとつにも、小さな情報が指向性が、とけて絡んで、ミクロの世界をつくっている。(小説を書く人はその登場人物ともいえるかもしれない。)

ミクロとマクロは繰り返し、無限にフラクタルな、理性と感性の境界はつかない、絡まり合った世界を映し出す。

少し大きすぎる話になってしまった気もするが、私は三文文士会というコミュニティがまさにこれを体現して、私に実感させてくれたのだと思っている。そういった世界観が念頭にある。

新入生歓迎号の文字を、行書と明朝体を混ぜたようなフォントにしたことも、そういった部分に由来する。

また、文芸誌の表紙として、「文字」というものについても一考した。

文字とは、言ってしまうと白い紙の上の、黒いインクの染みである。でもそれが、規則を持った並びとして、人に「読み込まれる」ことで、情報になり、風景になり、

世界になる、QRコードみたいな奇怪さ、情報が私の頭を通して私の世界を映し出す。「内は、そのままクロッキーに書いてあった。うくん。

文字を、ひとを、世界をうつしだすもの、瞳。

こういった部分と、体裁上白黒絵になることが確定していたことが結びついて、あのような黒の線による「ちやっとした絵になったのだと思う。」

裏テーマは、「未来」。

このテーマは、秋葉原を中心に開催されるイラストの展示会、絵師百人展の第二回のテーマである。

私はこの展示会へ、五月に足を運んだのだが、そのなかで、自分もこのテーマでイラストを制作したいという思いがあった。しかしその時間をとることができず、今の今まで放っておいたのを、この機会に形にすることにしたのだ。

私が「未来」というテーマで描くにあたって考えていたことは、「選択肢を絞らない」ということである。「未来」という言葉は非常に多くのイメージを想起し、多様な選択肢を与える語である。個人的には、結婚や老後といった、具体的すぎる未来の姿を描くことで、未来を狭めることはしたくなかった。

そういったこともあり、私が「未来」という語から想起したものは「ラプラスの悪魔」であった。ラプラスの悪魔が誕生したとき、それは一見、過去から未来にわたる全ての事象を予測するように思われた。しかしそれでも新たな不可知はまたも生じて、未来のことは、ラプラスの悪魔でもわからなかった。きつと不可知はいつだった、私たちの先に、無制限にひろがっているのだろう。

でも、それでもわからないから、わからないからこそ、面白いんじゃないか。人間は、いろんな可能性を、一緒にくたにして。

そうして「ラプラスの悪魔」が「夢」を見る、というイメージができた。

そして、未来のことはだれにもわからない、というこのイメージと、表テーマである三文という空間の中で、芸術の営みの中で、生じる人間の予測不可能性。このふたつが私の中で結びついた。

そこから浮かび上がったキーワードたちをモチーフに

していきながら、実際の絵としてのイメージをつくっていった。具体的に例を挙げるのは一応避けておこう。そのへんの想像はお任せする。ちなみに一個没ラフがある。さていよいよ絵ができて、タイトルをつけることになった。

裏テーマから、「ラプラスの悪魔」「夢」とある中、表テーマはどのように伝えようか。批評会における世界と世界の混交、ラプラスの悪魔すら未来を不確定にしまうもの、それらを端的に表すなら、「友達」であると思った。さらに、本来時間性をも超越してすべてを把握するラプラスの悪魔ですら敵わないもの、というニュアンスをつけたくて、「昨日の友達」という言葉が出来上がった。

さて、こうしてキーワードが出そろったが、すでに長い。そもそも「ラプラスの悪魔」をタイトルにいられた時点で長いだろうよ。でもどうしても削りたくなかった。そこで、「の」と「と」が「の、と、の、と、の」と、せめて発音してみたときに、気持ちよく流れるようなタイトルにした。経緯はざっとこんなところである。

たしかこのへんは神々のあらしい先生と通話で話しながら決めた記憶がある。提出先の加古さんにはどうしてもしきなり完成品を渡したいと思っていたので、途中での相談は彼に持ちかけていた。文字のレイアウトに関する相談やその他描きながらの調整を請け負ってくれ、感謝している。

余談だが、人物や模様の配置には、アサルトリイ(要は百合作品の系譜)の影響を多分に感じると後から見えた。

② 春号 — 《春曙／春眠》 —

デジタルイラストでカラー。表紙・裏表紙セットで一つの作品。よってタイトルこそスラッシュで区切られているが、分離しての作品やタイトルになることは想定してない。

当時の私はどうしてこれが締め切りに間に合うと思っただのか、理解できない。二枚書けば時間も二倍かかるという事になぜ気付かなかったのだろうか。申し訳ないことをした。

今回、はじめて季刊誌にカラーで表紙絵を描くにあたり、新歓号にはなかった裏表紙も含めた規格になるということで、どうせなら裏表紙も描いてしまおうか、という思い付きがあった。

また、新歓号のような特別号ではなく、季節の名を冠した三文文誌ということで、せっかくなら、きちんと、三文文誌の春号らしいイラストにしよう、という意識が念頭にあった。

まず、三文文士において、春、とはなんだろう、というところから考え始め、連想ゲームをつくっていったのだが、これが迷走に迷走を重ねた。

連想自体ははかどったのだが、いささか発想が飛びすぎていうか、まとまりのない状態になってしまっていた。具体的な例を挙げれば、「春」という言葉から始めたはずが、いつの間にか「神殺し」まで行ってしまった。どこかに「春」といえば「神殺し」だよ！ と言って手放しで同意してくれる人はいないだろうか。記録を見てみても、マインドマップはやり直して2つある。

そのままアイデアが固まらずになかなかラフに移ることができていなかったところ、何度も三文のメンバーや友人に助けをもらうことになった。

そのなかでも、核となるものは、見えてきた。それは、三文として春を描くなら、正面から桜が舞うようないわゆる春を描く、というよりは、そもそも春号は桜の季節には出ないし、春のもっと深い部分を描いた方がいいだろう、というものである。

春になるとバカが増える、ではないが、春って、狂気的な季節ではないだろうか。春は気温も上がり、色々な生き物が活動を始める、芽吹き季節である。エネルギーの盛り上がり、盛んな季節である。それって端的に、狂気だ。そういう狂的な部分、そういうところを正面から描いてみたらどうだろうか。

そしてその下、地面の下、根底には、冬死んでいった生き物たち、春には芽吹かない腐った命が、埋まっているのである。

ここで裏表紙と表表紙、というところと結びつき、デュオニウスのなものとアポロンのなものと、というところが再起された。また、春、文学といえば「春はあけぼの」と「春眠暁を覚えず」であろう、というアドバイスもあり、タイトルは割と早いうちから決まっていた。

それらの観念をモチーフに具体化していくにあたって、《春曙》側と《春眠》側で対になるように、各モチーフを並べていった。

ポーズは何度も裏返して見たときに似たようなシルエットになるように、表は腕をひろげた「赦しを与えるマリア」のポーズ、裏は天地を逆さにしつつ、腕は万歳をとった「吊るされた人」のポーズ。開花と羽化。光と五

月病。没になったモチーフとしては、槍と曲刀なんなのもある。一枚目の没ラフでは、春曙ちゃんは実際槍を持っている。

その他の詳しいモチーフについては各々考えてもらうことにしよう。

完成した作品としては、普通にイラストとして上手くないし、自分で見ても全体的に意味わかんない絵になったと思っている。ただまあそれは相対的なもので、完成品としての全力は出ているし、文芸誌の表紙としてどう描くべきか、苦しみながらもかなり楽しく描くことができていたので特に後悔とかはしていない。友人や先輩からは、結構いい反応がかえってきたのでうれしい。提出を待っていてくれた上にあたたかく受け取ってくださった編集の加古さんには本当に感謝している。

③ 夏号 — 《ソウゾウトハンギャクノシンワ》 —

春号に引き続き、デジタルイラストカラー。今回は裏表、背表紙をつなげて一枚のイラストにしている。

私はなんとなく、夏という季節に思い入れがよい。私の生まれは終戦記念日で、夏生まれである。さらに毎年夏、私は理科研究の課題をかなり本気で取り組んでいた時期が長い。それに夏にはただでさえ、長い休みがあつて、だからなんとなく、夏には特別なことが起こる、そんな経験があつて。

今回の表紙絵のテーマを決めるにあたり、春号のリベンジも兼ねて、私はかねてより、「デウス・エクス・マキ

ナ)、そして「神殺し」を主題としたいと考えていた。小説を書くということ、それすなわち世界を創造するということ、そうしてひとつの世界における神になるということ。

しかし、人間という神は全知でも全能でもない。そして人は自分で考えていることをすべて自覚しているわけでもない。人は時として、自身の作った世界の中の住人からさえ叛逆を食らうことがある。なぜそのキャラクターがこんな言動をしたのか分からない、勝手に登場人物が動く、そんな経験をしたことのあるしたことのある作家も多いのではないだろうか。そうでなくとも、当初の役割とは考えられないくらいの大立ち回りをするようになってしまった、なんてこともあるのでは。

こうして生まれた、「神」と「神を殺す」というイメージが、タイトルとイラストの主な構図となっている。以上が表としてのテーマである。

では「夏」という部分はどのように消化しようか。この部分に関しては、冒頭にも言ったが、かなり個人的な思いから発想して描いた部分が多い。

というか、この部分に関しては迷走して迷走した。うーん、いつも迷走してばかりでは……？
ただ、なんとなく「神」のイメージが浮かんではいたので、そのなんとなくにしたがってラフを描いてみることにした。試してみても、なんとなく構図が決まってきたのだが、モチーフがいまいち定まらず、具体的な形をどう持たせていったらいいか分からない。

そんな中、そのことを他サークルの友達に相談してみたところ、この「神」のイメージが、ミジンコの一種である、「ノロ」から来ているということに気がついた。そ

ういえば私は、夏休みの自由研究でプランクトンの培養に適した条件の実験をしていたことが、強烈な記憶となっていたことを思い出した。(ノロに関しては、私は図鑑でしか見たことはないが。)

そこからまた、夏には、「ひと夏の思い出」という言葉句があるように、なにか思い出を想起させるようなイメージがあるとも考えた。そこで今回、私の中で「夏とは、原風景を掘り起こすこと」とひとまず定義することにした。

また、記憶、ということ、夢の中のような、半分くらい無秩序で、まとまりがあるようで意味の分からないカオスな感じを狙っている。絵柄の雰囲気すらしたり、唐突な配置をしたりしているのはそのためである。

こうしてイラスト中にちりばめられた様々なモチーフや色彩が決まっていた。詳しく羅列するときはきりがないので控えるが、個人的な記憶や思い入れがかなり入り込んだイラストになった。

タイトルをつけるにあたっては、表のテーマをまるまる反映したような形で、それでも、実際の神話や新たな神話を直接のモチーフにしたわけではないこと、また、このイラストは私個人の記憶の、夏に関する記憶の掘り起こしによるところが大きく、より原初的な雰囲気を出したいということ、が念頭にあった。

神々のあらしい氏のアドバイスで、民俗学の方法に、漢字や熟語の持つ意味を排して固有名詞としての意味を強く持たせるため、カタカナで表記するというものがあるらしいということを知り、そのようにした。

さらにもっと抽象性の高く、意味のない呪文か何かのようなタイトルにしたいという思いから、文字に半角ス

ペースが入っている。

完成したイラストとしては、途中からそれを自分から狙ってはいたのだが、かなり意味の分からないイラストになってしまった。

自分の中でやり切った感はあるが、独りよがりというのも少し考えものかもしれない。

余談になるが、見開きイラストは背表紙の幅でサイズが変わるので、編集と相談しながら気をつけて制作しよう。詳しくは書かないが、サイズ間違いで一悶着あったので。

④ 明大祭号 下巻表紙

今年度の明大祭号は文士たちの活躍により上下巻セットで販売されることになり、光栄にもその下巻表紙を任せていただけたこととなった。

もっと言うと、私としては、上下巻になって欲しかった。というのも、前々から、狐狸野類先生が、久々に絵を描く機会に、どこかで表紙絵をやってみたいというところで、ではし印刷の都合上白黒になる、明大祭号がいいのではないかと、ということになっていた。

ところが、夏号表紙を描き終えた時点から、なんとなく次の絵のネタらしきものが浮かんでしまっていたのである。

絵を描きたいのはもちろん描きたいが、別に狐狸野先生をわざわざ押しつける気は勿論ない。まあ、別に今回くらい描かなくてもいいか、とも思っていた。

そんなところで、明大祭号が上下巻になれば、表紙絵

が2枚できるので、誰も損をしない。願ったり叶ったりであった。

というわけで形式は新歓号と同じく白黒のボールペン画。

依頼の時点で結構期日が迫っていたのもあり、いい機会だと思つて、今回は、あまり考えなくても手癖で描けるもの（＝自分の深いところにあるもの？）を描いてみようという感じにしてみた。マインドマップもちよつとメモ程度にしか書いていない。

「ああいう感じの髪の長い猫目の人」は、私の高校くらいの落書きから結構でてくる。おそらくイラストレーターの清原紘先生のイラストに高1くらいのときにはまっていたので多分その影響かと思われる。

今回の表紙絵のポイントとして、上下巻になる、ということはかなり大事な要素になるだろう。どうせ上下がセットということになるし、ふたりの人間が1セットのものを作り上げるというのは面白いだろうし、一目見て対の作品であることが明確に分かるような、そうでなくとも並んで見られることを前提にしたイラストにすることにした。

そこで、上巻の表紙担当した狐狸野先生にラフを見せてもらったところ、彼は鬼灯をモチーフに描くらしいことが分かった。

ここまででなんとなく自分は「ああいう感じの（略）人」を描くことは構想にあったのだが、ここでひとつ懸念点が浮かんできた。「植物の絵に人間の絵をぶつけてしまつて大丈夫だろうか。」

人間の顔というのは、人の視線を強く引き付けるもの

である。人の意識はひとの顔のように見えるものに対して非常に敏感で、それが鑑賞者と目が合うようなタイプのものならなおさらである。なのでよく漫画の表紙に横顔をつかわない方が良く、というのを聞いたことがある。それなのに植物の絵と人間の絵を横並びで置いてしま

うと、表紙絵を見る際の人の意識が一方に集中してしまつて、望ましくないのではないか。

しかし、これは完全に個人的な思いだが、私は人の顔が描きたい。特に今回は私の好きなものだけ描きたい。

また、同時に、上下で対になるイラスト、ということ、折角だから構図も上下巻で同じにしようか、そんなことも考えていた。そこでも問題に突き当たる。

狐狸野先生の絵では、画面の右下あたりに大きな鬼灯が描かれており、そこがフォーカルポイントになると思われる。しかしながら、人間の体というのはどうあがいても頭の下に胴体が生えているのだ。私の絵において、そこに顔を置くと、胴体が画面に入らなくなつてしまつて、左のほうにかけて余白が多く発生してしまうではないか。

これらの問題を一挙に解決するために、あの、冊子の向きに困る表紙絵が生まれたのだ。つまり、人間を逆さに配置すればいいではないか。

人間を逆さに配置すれば、構図的な問題も解決するし、いくらか目力だつて弱まる（と思う）。ちなみに、髪の毛の配置も、狐狸野先生の絵を見ながら、構図における「流れ」が同じになるようにしていることに加え、白黒のシルエツトも対になるようにしている。

ついでに「下」の文字も逆さになっているのは、「上」巻で、「逆さ」にして構図を交わせた、ということと、「下」の字は逆さにしても、実は「上」の字と同じ形にはなら

ないよね、ということを反映した、ちよつとした遊び心である。ちよつとくらい見づらくたっていいじゃん。

人間以外のモチーフについても、上巻の「植物」に対して、「動物的なもの」を意識してはいる。

文字の配置についてはかなり苦労した。自分はイラストの上下に文字を配置することはあまりしないのだが、それをして文字を目立たせるようにするのがかなり難しかった。正直完成品でもそれができたとは思っていない。その点については冬コミ号でリベンジすることができたのかもしれない。

完成した表紙はどうやら結構好評だったらしい。冊子を手にとつてくださった人たちから、好評の声をいただいたという旨のことを、文士の皆さんから聞くことになった。嬉しい限りである。

好きなものを割と好きに描かせてもらったということもあつてか、この絵には迷走した要素があまりなく、かなりさらさらと完成させた。そういう絵が対外的にも好評というのは、なにか関係があるのかなあと思つてしまふ。

ちなみに今回の表紙絵にはタイトルがない。それは単純に狐狸野先生がタイトルをつけていなかったからそれに合わせてつけなかった、というので、それ以上のことはないのだが、脳内タイトルをつけるとすれば、《他我》といったところだろうか。

季刊誌ということで、デジタルイラストでカラーに戻る。

秋号の表紙もまた迷走したのだが、今回は、マインドマップになってからではなく、そもそもマインドマップになるのに時間がかかった。

まず、今回の制作にあたっては裏テーマが先行してイメージが固まっていた。

明大祭号の表紙が好評だったこと、また、私生活でいろいろ思うところがあったことで、私個人としては、「自分には芸術的センスがあるのだろうか？ あるとしたらそれはどのくらい、どんなものがあるのだろうか？」という疑問が強くなっていった。

「芸術的センス」、そう呼んだ方が都合のいいものがあるのだろう。私はそれを認めているが、自身はこの言葉を自他に対しては使わないようにしている。なぜかというと、それは私が基準をもちあわせていないからだ。

プロやなにか芸術で商売にこぎつけている人、また、芸術教育によって過去の蓄積を習得した人、そういった人たちがこの言葉を使うことには、ある程度の信頼がおける。彼らは一定の基準のもとで、確固とした何かを得ているからだ。

しかし、私は、どこかの馬の骨とも知らないただの絵を描くだけの人間である。私程度の教養や感覚が指し示す尺度なんてあまりにも信用ならない。だから私は、芸術に対して批評をすることはあるが、評価を下すことはしないように心がけている。

基本的にそういったスタンスをとっている私だが、ふと、思ってしまった。私には芸術的センスはあるのか？ それを測ってこなかったのは、こんな理性的な理解では

なく、ずっと真剣に芸術に向き合ってこなかった、その言い訳に過ぎないんじゃないか？

心のどこかでは私はプロになりたいのかもしれないし、まあ、本当のところは自分でもよく分からない。ぼんやりそう思っている程度では、やはりあまり現実味が無いことだとは思っているのではあろう。

とはいえ、ちよつと一度気になってみたら、それなら自分なりに向き合ってみてもいいんじゃないだろうか。そんな気もしてきなのだ。

私の限界として、どんな絵が描けるだろうか。

ということ、明大祭号の手癖をもう一度煎じてみることにしてみた。まあこんな経緯もあって、今回の作品も勢いで描いたものが多い。手癖ちゃんがおおづえをつけているポーズをとっているのも、マインドマップを書くくまへの本当にぼんやりしたイメージのときに突然浮かんできたものだったりする。

自分の中からどれだけのものが引き出せるかということ、これを重視したかったため、今回はあまり調べ物をしないで描いている。アイディアもあまり募らなかつた。そのため、私が簡単に描ける、あまり調べ物をしなくても描ける絵になっている。

また、輪郭線をつかわないで描いてみたり、やけになつたみたいに模様を敷き詰めてみたり、勢いで描いたところがないように出ているような気がする。要は、デザインをするべき箇所が少なく、私が手を動かしていれば描ける、くらいのものということかもしれない。

表のテーマも忘れてはいけない。今回は明大祭号と違って季節を冠していることだし、きちんと表のテーマとしてのイメージも膨らませた。

秋というと、実りの季節だ。今まで蓄えてきたものを、寒い冬に向けて実を結ばせる、豊穣と同時に、枯死に向かつていく季節だ。

季節だけではなく、この代での三文文士の活動も半年以上が経って、場も醸成されてきているように感じる。

また、文士たちの作品そのものも、実りであるということもできるだろう。

しかし、これは持論だが、芸術とは呪いである。

芸術の価値は脆い。なにがその良きなのか、確固たる基準もなければ、社会的な存在意義すら怪しい。不要と断じることすら簡単に見える。

それでもどうしてか時々、芸術に魅せられてしまう人がいる。本当はいらぬはずだと思っていたものが、何か急にほしくなる。ふとした芸術に心を奪われる。

そしてその中の幾人かは、芸術に捉えられる。芸術を生み出す衝動に捉えられてしまう。ゴールも、正解も、ひよつとしたら価値や意味すらない、不毛な営みに私たちを捉えてしまう。

だがすべての呪いは同時に祝福である。

自らを捉え、まとわりつき、離さない苦しみだが、しかし幸福をもたらすこともある。だからこそひとは芸術から逃れることができなくなってしまうのかもしれない。

というわけで、タイトルが早々に決まってしまった。

《実りの祝福》。実り。それは文士たちの作品の実りであり、私たちが捉えて離さない、芸術を渴望させる祝福である。このあたりから画面内のモチーフは自ずと決まっていた。

実り、秋に関連して、紅葉、というのもひとつの大きなモチーフになっている。

紅葉とは、生きることそのものを燃やす行為だからである。

裏表紙についてだが、今回は一枚の絵で仕上げよう、という意識が強かったため、完全に制作を考えていなかった。そのため急遽加古さんに用意してもらったことになった。この場を借りて感謝を申し上げたい。

さて、そうこうしている間に、間近に次の大きなイベントが迫ってくるようになった。冬コミ参加である。

⑥ 冬コミ特別号 — 《呪》 —

今年の三文文士会は冬コミに参加することになった。対外的な販売の機会が一つ増えることになる。

たしかに明大祭でも部誌の販売は行っているが、それ以上にコミケのような大きなイベントに参加すること自体が嬉しい。

しかし冬コミ号の（表紙絵の）締め切りは日程の都合上かなり秋号と近くなってしまふ。加古さんにもその点はかなり心配してもらい、代替案等ももらっていたが、協議の結果、どちらの表紙絵も担当させてもらうことと相成った。

とはいいつつ、加古さんの心配も見事的中することになる。他に依頼されていた絵や秋号の表紙の制作が長引き、締め切りを大きく過ぎることになり、冬コミ号の制作に取り掛かるころには、冬コミ号の締め切りが三日後に迫っていたのだ。

冬コミ号は印刷に余裕がないので、こればかりは締め

切りを延ばしてもらおうわけにはいかない。

要は三日で描き上げたのである。

そんなこんなで自分のイラストの描き方について模索していた私に、非常に面白そうな機会が回ってきたというものである。ここで、折角締め切りも秋号と近いものだし、いつそ対の作品にしてみましたどうか、という考えに至った。喜びと同時に束縛をもたらず、呪いのような祝福が与えられるのであれば、その呪いを力として、嬉々として呑み込むような。これも秋号に引き続き、タイトルが先に決まったタイプの絵だ。それもあつてか、マインドマップもかなり簡潔で、勢いで描いたところが大きい絵である。

まず、表のテーマとしては、「郷に入つては郷に従え」といったところか。

季刊誌と違って季節感を意識する必要はないが、そのかわり、冬コミという貴重な機会に出すのだから、いかにもコミケに出してありそうな感じを出そうか、と考えたわけだ。もうそれはそれはガッツリアニメイラストっぽい感じで。

また、やはり文芸誌の表紙ということで、「文字」を使つて何かできないか、ということも考えていた。

そして、秋号と対の作品、とのことで、禁断の果実にかぶりつく、ということも決まっていた。

文士の作品としての「実り」があるのなら、それにかぶりついたときにあふれてくるのは、彼らの世界、言葉

文字であろう。文芸誌には、作家のペンネームや作品タイトルを表紙に掲載している場合も多い。そこで、文字

で何か遊べないか考えていたこともあつて、掲載作家全員のパンネームをイラストの模様のように使うことにしたのである。

さて、秋号の裏テーマが、「自分の限界」なのだとして、冬コミ号のテーマはなにになるべきだろうか。

秋号で一度、自分を出し切れたと思うのであれば、次は、今まで自分がやってこなかったもの、できなかったことの吸収、になるのではないだろうか。

ならばいっそ、作品のすべてを吸収に捧げてもいいかもしれない。

というわけで、今回のイラストでは調べ物を制限しなかったところか、描き進めると同時に積極的に言いながら描いた。イラストを魅力的に描くための技術を解説した動画を片手に、自分の画調は残しつつも、陰影のつけ方や色の塗りなどは、かなり参考にさせてもらった。

実際どういったノウハウは本当に役に立った。やつてみると効果は靦面で、自画自賛ではないが、工程を経るごとに自分のイラストがどんどん魅力的になっていくような感覚があり、描いていて非常に楽しかった。

といいつつ、思い返してみれば結構私の好き勝手している部分も多い。「逆光にすればエモくなる」という動画を見た割には全光だし、「みだりにカラフルにしようとする」と失敗する」という動画を見た覚えがあるが、結局原色に近い色で補色や色相の遠い色を使っている。まあ一応メインの色相は絞つたり、最後に文字を入れる際も、実際の雑誌の装丁を参考にしながら文字の配置をしたり、話をきいてちゃんと参考にしているのは確かである。

色彩については、本当に趣味が出たように思う。赤を中

心に原色に近い色をぶつけてまぶしくしてみたり、思いつきり黒を使ってみたりしているのは、中学の美術の授業あたりからすでにそういうところがある。激しい原色の色彩と、呪力的なイメージの黒が、作品のテーマとも結構マッチしたと思っている。

キャラクターの顔もなんというか、9割くらい趣味である。

ちなみに私の好きな絵師は、芸術家の岡本太郎とイラストレーターのLAM。

○ 本章のまとめ

こうして、いつのまにか自分が表紙絵を描くことが自然な流れになっていて、気がついたら今年度のすべての三文文誌の表紙に関わることができたのは、この三文文士会の一員として、光栄であると同時に喜ばしく思う。

振り返ってみて思うのは、こうして継続的にひとつのことに関わられたということの面白さを知ることができて本当に良かったということ、そして、毎回編集に迷惑をかけすぎ、といったところだろうか。

貴重な体験を、感謝してもらえない思いである。これから精進していきたい。

繰り返しになるかもしれないが、こう、様々な意図を書き連ねてみたものの、私はこの意図が正確に伝わったり、この解説によって、読み取られたことを修正できたりすればいいと思っているわけではない。あくまで絵・表紙絵というものを考える端緒として、また、自分用の備忘

録として、である。

結局のところ、描かなくてもいいから絵に興味をもつてほしい、絵を通して感じられること、共振できること、そこから何かが生まれることが増えれば（私自身がそうだから）みんなも私も面白くないかという風に思うのだ。おせっかいと承認欲求のませめものである。

4、伝えること、伝わること

こうして振り返りながらつらつら書いていると、わざわざかくということ、その意味を考えてしまう。

これだけかいてきて思うことは、まず伝えたいことが経緯を抜きにしてもこれだけあったということ。それには自分でも素直にびっくりした。

描くときは確かにこれらのことを考えていて、それを使って形にしていくのだが、改めて文章のかたちに書き出しなおしてみると、それが絵のかたちに描くことができていたのか、結構不安になってくる。

でもそれが絵となると特にであるが、正確に考えが伝わることって、あんまり大事じゃなかったりする。

結局、芸術を前に、何かを感じて、それがその人の中に何かを生み出すことがあれば、それでいいのだと思う。むしろその違いを楽しむことこそ醍醐味ということもできる。

ただ、だからといって何も考えずに描けばいいということでもないだろう。すべてが伝わらないそのなかでも伝わることはあるのだし、そもそもとして、表現したいという思い、伝えようという思いが作品をつくる動機になるところもある。

共振。私の中でふるえたものが、そういう芸術を介して外に出て、それが誰かのこころをふるわせる。そうやって伝わっていくものは、そのまま伝わることもあるけれど、全く同じようにふるえるとは限らないし、全く違うふるえかたをするかもしれない。

ではそれをこうして書いてみるというのは？

正確に伝えることが至上でないならば、この営みは何になるんだろう。それどころか、受容者の自由な読みを妨げることになるのではないか？

そういう葛藤も確かにある。でもやっぱり私の核にあるのは、伝えたい、という思いである。

私はなにもこの書き物を、私の絵を正確に理解してもらうために書いているわけではない。

あたりまえだが文芸サークルであってイラストサークルではない三文文士会において、イラストについて何かがかえってくる機会って少ない。それもなんだかさみしいから、三文文士のメインステージである文章という形で、ちよつとこういう情報を投げ込んでみたらどんな反応がかえってくるのかな。そう思っただけでみたのだ。

ここは三文文士会。文芸作品を投げれば、文士諸君が全力で相對してくれる。とてもいい環境だ。イラストが文芸に嫉妬しているのかもしれない。それもお門違いな話だが。

人間の本质とは、芸術である、と私は考えている。

思うこと、伝えること、伝わること、それがすごくあまいなかたちで、でもたしかにつながって、波のように、ひろがって、そういうやりとりがあつまって形にな

ってゆく。

芸術ってほしいというかたちをしている。そしてそれとおなじように、わたしも、あなたも、あのこも、そのなかに、ゆるやかに存在している。

そういうものなんだと思う。たぶん。

物心がついたときには、ほめられるのがうれしくて、小学生のときには、友達にみせるのかおもしろくて、中学生のときには、絵はメッセージだと思って描いていて、今は人としやべっていないと生きていけないから絵を描いている。

そんで大学に入ってから、書くことを始めて、全然量書いてないとはいえ書いていられるのは、やはり三文文士会で、批評会があるからだと思う。

やっぱり私はだれかは分らないけれど、私をみてくれる誰かにむけてなにかをかいているらしい。

私がこうだって、私が思うだけじゃ、たぶんダメなのだ。思うこと、伝えること、伝わること、思われること、伝えられること、思わされること、伝えさせられること、そういう世界のどのあたりかに、私、って範囲があったり、あなた、って範囲があったり、ときどきかさなったり、するんだと思う。

私にはまだまだはなしたいひとも、かきたいものもたくさんいるから、しばらく芸術とははなれられそうになり。